

日本YWCA機関誌『明治の女子』の書誌分析

A Study of Young Women's Christian Association's Journal
“MEIJI NO JYOSHI”

樽松 かほる

KUREMATSU Kaoru

キーワード： 日本YWCA キリスト教 女性キリスト者 女性の自立 日本の近代化

はじめに

本研究の全体構想は、日本YWCA (Young Women's Christian Association) の機関誌『女子青年界』の誌面が近代日本の女性キリスト者のキャリアデザイン形成に関わるどのような情報を発信していたのかを明らかにすることにある。

YWCA機関誌は『明治の女子』(1904年5月～1912年7月)、『女子青年界』(1912年9月～1944年3月)、『女性新聞』(1946年3月～1950年12月)と変遷している(それらを総称して一般に『女子青年界』と呼ばれることが多い)。すなわち、同誌は明治、大正、昭和戦前・戦後期に亘り、途中太平洋戦争の期間の中断を挟み、約50年の間継続的に刊行されている。女性雑誌の中では、キリスト教というマイナーな分野の雑誌ではあるが、20世紀前半の日本の社会と関わり、どのような女性の生き方(キャリアデザイン)を志向していったのかを知る好個な一誌といえるであろう。

周知のように、キリスト教が近代日本の女子に与えた影響、とりわけ女子中等教育への貢献については、今更改めて述べるまでもないであろう。1870年代にはいと、ミス・ギダーの学校(1870年)、青山女学院の前身である女子小学校(1874年)、遺愛女学校の前身である日々学校(1874年)、立教女学校(1874年)と、各教派の女性宣教師たちが次々に女子の学校を設立し、教育活動を進めている。そうしたキリスト教主義の女子学校史研究、あるいは学校教育を中心とした研究に関しては、今日それなりの成果をすでに得ていると思われる。しかし、学校教育でも、教会教育でもない、社会教育の分野に属するYWCAの活動については、これまでほとんど等閑視されてきた。

YWCAの活動が対象とした女性は、むろんキリスト教主義女学校の生徒たちが中心であった。1905年9月、小石川伝道女子学校内で、日本最初的女子青年会が発足したが、その後、キリスト教主義女学校内で、あいついで女子青年会が組織され、日本YWCAが企画する夏の修養会などでは、女学校内のYWCAのメンバーがその活動の担い手となっている。その面から見れば、YWCAもまた、キリスト教主義女子学校教育と深く関わっていたことは否めない。しかし、YWCAが対象とした女性は学生だけではなく。職業婦人や、青年女性を対象とした活動であった。もちろんYWCAの活動は都市部を中心としており、農村部までの女性を対象とした活動とは言えず、その意味では限定的なものであった。それゆえ、読者対象は、中等以上の教育体験者や都市部の女性中心という限界があると推測される。特に、明治期の読者層は中流以上の女性を中心であったと思われる。当然、女性キリスト者一般の育成というより、女性リーダー育成の傾向が強かったであろう。YWCAで育った人材の多くが日本基督教矯風会の担い手となっている。同会が日本社会の羞部に関わって活動を展開していったことなどを思うとき、読者層の限界の問題を越えて、YWCAの活動が新しい日本女性の生き方に与えた影響は、小さいとはいえないであろう。機関誌

の分析を通じて、どのような女性のキャリアデザイン形成を目指したのかを明らかにする作業もまた、小さな試みとはいえない。

本稿では、研究の第1段階として、明治期の機関誌『明治の女子』の書誌的な整理を試みた。なお、本稿で紹介した記事内容に関する分析は別稿に譲りたい。

1、発行母体日本YWCAの沿革

発行母体であるYWCA（女子キリスト教青年会）の沿革について知る資料は、管見した範囲では極めて少ない。『水を風を光を 日本YWCA80年1905—1985』（1987年）、『年表 日本YWCA80年史 1905-1984』（1985年）、『日本YWCA100年史 女性の自立をもとめて 1905-2005』（2005年）などである。地方支部による年史刊行物もあるが、いずれも、YWCA内部において組織された委員会などによる編纂に限られている。これらの他には、『女子教育界』の復刻に当たって寄稿した武田清子の「解説 ―日本YWCAの使命と特質」がある（1994年）。

上記の資料に依拠しながら、機関誌の発行母体である日本YWCA（女子キリスト教青年会）の沿革を素描してみよう。

YWCAの誕生は、19世紀のキリスト教リバイバル運動に端を発している。当時、キリスト教のメッセージを新しい生活秩序の中に生かすことに大きな関心が集まっていた。宣教師や医者、ケースワーカーたちが欧米からアジアへと飛び出し、活動を展開していた。これらの活動は、一連の宗教的リバイバル運動となり、信仰体験に重きを置く福音主義的性格に彩られ、日々の生活の中で神の意志を実践し、献身の生活を送ることを前面に掲げていた。19世紀の欧米社会は人道主義、社会活動が根付いた時代であったが、同時に1890年全米女子参政権同盟が結成されるなど、女性解放思想が展開した時代でもあった。こうした傾向のなかで、奉仕活動に積極的に参加する女性も多数出現していった。

1855年、英国YWCAの発足に繋がったキリスト教信仰に立つ2つの別々な運動が英国で展開された。ひとつはエマ・ロバーツがはじめた静かな精神運動である。産業化の波にさらされている若い女性たちの状態に心を痛め、毎週土曜日祈祷会を開催、婦人の感化力がいかに大きいかを説き、「女性は清く高尚にならなくてはならない」と、説いた。「プレイヤーユニオン」は各地に広がった。もう一つの運動は、1853年のクリミア戦争が契機となった。レディ・キナードは植民地への移民船に乗る若い女性の世話やクリミア戦争の負傷兵の世話をする女性たちのための宿泊施設を設け、宿泊施設は地方から働きに来る若い女性たちのホステルとなる。そこでは聖書クラス、クラブ活動、ライブラリーなどの活動を行い、都会で働く女性たちに提供した。1876年、二人がロンドンで出会い、2つの運動をひとつにして信仰に根ざす仕事に発展させようと語り合った。すでに存在していたYMCAにならない、YWCAの用語を使用していたが、1884年、英国連合中央委員会が組織され、翌年にはヨーロッパの女性対象の運動を推進する委員会とヨーロッパ以外の外国の活動に責任を持つ委員会を設立した。初期のYWCAの特徴を挙げるなら、第1に、福音主義的性格が顕著

であった、第2に、教派を超えた運動であった、第3に、無給のボランティアのリーダー（社会的エリートと目される婦人）が役割を担い、集会などの活動を行った、第4にミッションへの関心が高かった、などの点がみられる。

一方、米国のYWCAの歩みは、1857~58年ニューヨークのマーシャル・ロバーツがユニオンプレイヤーサークルを創設したことに始まる。1860年、働く女性のためのホステルを開設、カナダなどにも広がっていった。各都市でのYWCAの活動と並んで、大学にもYWCAが組織され始めた。当時多くの大学ではすでに強力な学生組織をもっていたが、1872年イリノイ州の師範学校で最初の学生YWCAが組織され、各地に広がった。1886年、市と学生とのYWCAが一体化した。1987年、米国YWCA加盟団体は129を数え、1893年には307に増加している。こうして、米国YWCAは19世紀後半急速に都市部を中心に拡大していった。

1900年、世界YWCA総幹事レイノルズの来日が日本YWCA発足への契機となった。レイノルズを迎えて、日本YWCA創立委員会が設立された。（委員長M・A・ホイットマン、フィッシャー夫人、津田梅子、平野はま子、小崎千代、花井、河井道）。

1900年は、日本に在住する女性宣教師が集まり、全国婦人宣教師会議を開催した年でもあった。前年には、学校内での宗教教育の活動を禁止した「文部省訓令第十二号」が発令され、それまでそれぞれのミッションと緊密な連絡のもとに学校教育を運営してきた各キリスト教主義学校が協同して文部省と交渉に当たったり、情報交換をするなど、教派を越えた学校間、教会間の交流が盛んになった。そうした背景のもと、先の宣教師会議が開かれ、協力して日本の伝道に当たることを確認した。

さらに、翌年の1901年第2回世界YWCA会議で中国、日本での活動を話し合われ、1903年北米のYWCAの支援を受け、テレサ・モリソン（1905年12月まで在日）が日本YWCA創立援助のため幹事として来日した。モリソンも加わり、創立ための準備は進行された。

まだ正式な活動が開始されていない1904年5月、創立委員会は、YWCA機関誌『明治の女子』を発刊した。発行部数600~700部であった。

日本で宣教師としてすでに働いたことのあるクラリッサ・H・スペンサーが世界YWCAの幹事となると、日本への支援が強化され、カナダYWCAのマクドナルド（Macdonald, A. Caroline）を日本に派遣した。1904年12月来日したマクドナルドは、麹町土手3番町の西洋館で、ただちに活動を開始した。女学生に開放し、集会を開催するなどの活動をはじめた。日本YWCAは、英米のYWCAと同様、聖書を学び信仰による人間形成と社会的、人類的交わりと社会的な課題への取り組みの2点を目標とした組織として設立された。

2、雑誌の概観

すでに触れたが、『明治の女子』は日本基督教女子青年会準備委員会（設立前年より刊行）より発刊されたが、後、日本基督教女子青年会中央委員から発行した機関誌である。

創刊号「発刊の辞」によれば、聖書研究、女子に興味ある事柄と参考となる論説、内外の

YWCAの事業活動、外国の女子に関する情報を掲載する、とある。

発行兼編集人は、2巻1号モリソン、2巻6号よりマクドナルドと、YWCAの外国人幹事が中心となって刊行していたが、9巻6号より「明治の女子編輯主任 小此木松子、明治の女子編輯掛 小橋三四子」と、日本人スタッフが担当するようになる。

雑誌の体裁は、初期は表紙や奥付部分もなく、聖書研究のパンフレットのような体裁である。2巻1号より、表紙、奥付、目次などがつけられ、雑誌の体裁をおびてくる。定価年50銭。2巻1号から2巻8号まで、奥付には「聖書研究録」とある。2巻9号以降『『明治の女子』は日本基督教女子青年会中央委員が発行する機関雑誌也』と奥付に添え書きがみられる。2巻9号前後から、編集方針が変化したことが示唆される。

発行時の使用言語は、日本語と英語であった。2言語併記の形式は、創刊から2巻12号まで続くが、その後、和文のみを使用するようになる。2言語併記の編集形式の時代でも、英文部分は和文とほぼ完全対応の形式、聖書日課のみ対応、一部対応などの形式などの差異が見られる。発行当初2言語が用いられたのは、最初の編集は宣教師中心であったという事情によると想像されるが、次第に日本人が編集に直接加わったという点と読者層を広げるためと推測されるが、その間の事情に触れている記事は掲載されていない。

発行年月日一覧

発行年月日	巻	号	ページ数 (和文+英文)
1904 (明治37) 年5月10日	1	1	9+12 = 21
1904 (明治37) 年6月1日	1	2	6+11 = 17
1904 (明治37) 年7月1日	1	3	19+12 = 31
1904 (明治37) 年9月1日	1	4	13+8 = 21
1904 (明治37) 年 (月日不明)	1	5	英文のみ6
1904 (明治37) 年11月1日	1	6	11+6 = 17
1904 (明治37) 年12月1日	1	7	16+8 = 24
1905 (明治38) 年1月1日	1	8	19+8 = 27
1905 (明治38) 年2月1日	1	9	10+6 = 16
1905 (明治38) 年3月1日	1	10	10+6 = 16
1905 (明治38) 年4月1日	1	11	12+6 = 18
1905 (明治38) 年5月1日	2	1	27+6 = 33
1905 (明治38) 年6月1日	2	2	13+8 = 21
1905 (明治38) 年7月1日	2	3	26+6 = 32
1905 (明治38) 年8月1日	2	4	26+6 = 32
1905 (明治38) 年9月1日	2	5	16+6 = 22
1905 (明治38) 年10月1日	2	6	13+6 = 19

1905 (明治38) 年11月1日	2	7	$21+12=33$
1905 (明治38) 年12月1日	2	8	$16+10=26$
1906 (明治39) 年1月1日	2	9	$18+6=24$
1906 (明治39) 年2月15日	2	10	$18+4=22$
1906 (明治39) 年3月15日	2	11	$24+2=26$
1906 (明治39) 年4月15日	2	12	$26+2=28$
1906 (明治39) 年11月15日	3	7	30
1907 (明治40) 年4月15日	4	4	32
1907 (明治40) 年5月15日	4	5	36
1907 (明治40) 年6月15日	4	6	35
1907 (明治40) 年9月15日	4	8	18
1908 (明治41) 年1月15日	5	1	40
1908 (明治41) 年2月15日	5	2	38
1908 (明治41) 年3月15日	5	3	34
1908 (明治41) 年4月15日	5	4	46
1908 (明治41) 年5月15日	5	5	54 葉桜号
1908 (明治41) 年6月15日	5	6	42
1908 (明治41) 年8月15日	5	7	72
1908 (明治41) 年9月15日	5	8	40
1908 (明治41) 年10月15日	5	9	38 附録6
1908 (明治41) 年12月15日	5	10	40
1908 (明治41) 年12月15日	5	11	38
1909 (明治42) 年1月15日	6	1	34
1909 (明治42) 年2月28日	6	2	24
1909 (明治42) 年3月15日	6	3	24
1909 (明治42) 年4月15日	6	4	24
1909 (明治42) 年5月15日	6	5	24
1909 (明治42) 年6月15日	6	6	24
1909 (明治42) 年8月15日	6	7	48
1909 (明治42) 年9月15日	6	8	24
1909 (明治42) 年10月15日	6	9	24
1909 (明治42) 年11月15日	6	10	24
1909 (明治42) 年12月15日	6	11	30

1910 (明治43) 年12月15日	7	12	34
1911 (明治44) 年6月1日	8	6	31
1911 (明治44) 年10月1日	8	9	31
1912 (明治45) 年1月1日	9	1	31
1912 (明治45) 年2月1日	9	2	29
1912 (明治45) 年3月1日	9	3	35
1912 (明治45) 年4月1日	9	4	33
1912 (明治45) 年5月1日	9	5	34
1912 (明治45) 年6月1日	9	6	35
1912 (明治45) 年7月1日	9	7	37

同誌は、1904年5月10日創刊からほぼ月刊誌として刊行されている。特集号は発行されなかったと思われるが、増大号は刊行されている。発行日は1巻2号から、1日発行。2巻10号から7巻12号まで15日発行。8巻6号から再び1日発行に戻っていることが確認できる（欠号のため、断定不可）。巻数は3巻までは5月から4月を巻の区切りをしているが、4巻以降は1月から12月を区切りとして巻数を数えている。

1冊の頁数は、最小で全16頁（1巻9号）、最大で72頁（5巻7号）である。（1巻5号を対象外とした）。各号の頁数は不定である。本誌は商業誌ではなく、その時々に掲載すべき情報や寄稿原稿の多寡により編集をしていたと推測されるが、雑誌としては決して頁数の多いほうではない。一種のパンフレットのな雑誌と見ることができる。

創刊号、1巻2号までは英文頁のほうが和文頁より多い。その後は和文頁が多くなり、英文頁が掲載された最後の号となった2巻12号は英文2頁のみとなっている。また、表からも分かる事だが、現存しているバックナンバーは多くはなく、欠号は31冊と推測される。『明治の女子』の刊行期間は8年2ヶ月の間であったので、3年分近くが現在未見となっている。現存率の低さはどのような理由によるものかは明らかではないが、発行部数が少なく、読者層が比較的限定された雑誌であった故と想像される。

3、誌面構成の変化

欄構成の変化を概観してみる。

創刊号を見てみると、発刊の趣意文と「聖書日課」で構成されている。

創刊号

欄	タイトル	著者
	高きに登れ	
	発刊の辞	
	開書	テリーザ・イー・モリソン
聖書日課	明治三十七年五月分	エフ・エム・フィウジル註解
	OUR GREETING	
	THE CALL OF FUJI	
	A LETTER	Theresa E.Morrison
聖書日課	OUR BIBLE READINGS. May 1904	F.M.Fugill

その後、1巻7号まで「聖書日課」が誌面のほとんどを占めている。欄名の見出しもほとんどなく、「小文」欄のみが設けられている誌面構成となっている。

誌面構成変化が見られるのは、1巻8号である。

第1巻第8号

欄	タイトル	著者
	愛読諸君に告ぐ	
聖書研究	第一週第二日『先駆者』	ハワード・エー・デヨNSTON
聖書研究	第二週第七日『早天にイエス祈り給へり』	主の賤婢
聖書研究	第三週七日『病あるものは医者を需む婢む』	ビンフォード
聖書研究	第四週第三日『安息日』	ジョージアヌ・ボーカス
家庭	家庭の建設	
寄書	天啓としての聖書、これが統一及び調和	ケー・エー・トリストラム
寄書	新進の生命	真堂学人
	RING OUT WILD BELLS (*詩・"INMEMORIAM"より)	(*TENNYSON)
	"THE CANYON FLOWERS"	
(*詩)		M.K.A.Stone
	WOMEN'S COLLEGES IN AMERICA	Charlotte B.Deforest
(*小文・ The Outlook より)		Elizabeth McCracken

1巻8号には「家庭」、「寄書」欄等が設けられ、女子青年の読者層を想定した編集が見られる。その後の1巻9号から2巻2号まで次々と新しい欄が設けられて、誌面構成の面で雑誌らしさを増している。1巻9号では「社説」欄、「家政」欄、1巻10号では「講演」欄、1巻11号では「史伝」欄、2巻1号では「論説」欄、「藻塩草」欄、2巻2号では「雑録」欄が登場している。なお、2巻1号から目次、表紙、奥付が確認できる。本誌は創刊1年後ごろ、雑誌

としての体裁を整えたといえるであろう。

2巻7号では、「月草」(囲み記事)欄が登場しているが、注目されるのは2巻12号から「青年会記事」(5巻2号からは「女子青年会」と欄名を変更)欄が登場していることである。同欄の設置により、本誌は組織に関する情報を掲載するようになり、機関誌として本格的な役割を果たしていく雑誌として機能していったと、想像される。さらに、3巻7号からは、「雑録」、「雑報」欄が登場し、益々、組織の機関誌としての体裁を整えていった。

第4巻第4号

欄	タイトル	著者
評論	弱者の友イエス	山室軍平
評論	東洋的意識が神的王国に対してなすべき貢献	ホール
文芸	会见	マークトウエン 西本翠陰
文芸	藻の花	狐雁
文芸	こんな夫婦	百島冷泉
雑纂	世界の女子教育	ラウス
小説	聖者の梗概	記者
雑報	(*ラウス嬢) / (*スペンサー嬢) / (*ラウス及スペンサー嬢等..) / (*東京中央委員等) / (*女子青年会寄宿舎) / (*女子青年界夏期学校) / (*都下及地方に於て..) / 地方会の状況/函館基督教女子青年会/東京小石川指々谷町女子伝道学校内	

一方、4巻4号には、「文芸」、「小説」欄が登場、その後「名家訪問」(5巻4号)、「静思」、「短歌」欄(5巻5号)、詞藻欄(5巻6号)と、文芸関係の欄が登場している。文学的な嗜好を拡大していった編集となっている。

ところが、5巻8号からは、本欄と彙報欄のみの構成している。続く5巻9号、10号では論説と無名欄のみで構成しているが、5巻11号からは以前の編集スタイルに戻っているが、再び、大きく誌面が変化するのは、6巻2号である。

第6巻第2号

欄	タイトル	著者
	修養と宗教	
	伝道開始五十年記	
特別寄書	愛と国民性	柏井園
講壇	生死論	綱島佳吉
講壇	信仰の復活	デビス
史伝	ヘレンケラー嬢	
史伝	亜弗利加の父リビングストン(一)	
文苑	生命の鍵	志良為生

もしほ草	志高き婦人	
もしほ草	本分に従へ	
落葉籠	気転も資本の一つ/音楽と色/害虫の損害一年壱億五千万円/ 天才は末子に多し	
海外たより	米国に於ける青年会及其事業/フィシタル嬢の日本に関する 演説/モット氏の欧州に於ける運動	
会報	女子英学塾女子青年会/青山女学院女子青年会/フェリス女学 校女子青年会/共立女学校女子青年会/京都同志社女学校女子 青年会/広島女学校女子青年会	

誌面は「特別寄書」、「講壇」、「史伝」、「文苑」、「もしほ草」、「落葉籠」、「海外たより」、「会報」の欄で構成している。その後も次々と新設欄が登場している。6巻3号以降の新設欄を列举してみると、次の通りである。

6巻3号 説苑、外報欄登場、6巻5号 聖書の研究欄登場、6巻7号 静思の友、験談、夏期講習会講演、編輯机上、夏期講習会記事、こころの花欄の登場、7巻12号 面影集、道の栞欄登場、8巻6号 会の消息、編集部より欄登場、8巻9号 伝記、日本基督教女子夏期修養会講演、各地に行われた修養会会報欄の登場、9巻1号 談叢、講話、新刊紹介欄の登場、9巻2号 感話、経験欄の登場と、次々に新設欄が設けていっている。

以上の欄構成の変化を整理して時期区分してみる。

- 第1期 (1巻1号～) 聖書研究 (日課) 中心、和文・英文による編集
- 第2期 (1巻8号～) 諸欄構成の登場
- 第3期 (2巻12号～) 会の消息に関する情報の登場
- 第4期 (4巻4号～) 文芸的記事の拡大
- 第5期 (6巻2号～) 諸欄の大幅な変化

以上を概観してみると、雑誌としてかなり短い周期で欄構成の変化が見られる。

4、欄の特徴と傾向

欄ごとの記事数を数量的に整理して、機関誌の特徴を見てみたい。

- ① 聖書日課、聖書研究欄 60点
- ② 論説 46点
- ③ 雑纂、雑録 34点
- ④ 女子青年会、女子青年会記事、会の消息 25点
- ⑤ 社説 17点
- ⑥ 家庭、家政 12点

集計の結果から、本誌は聖書研究に関する情報に傾倒した雑誌であったといえる。記事数の多い「聖書日課・聖書研究」欄、「論説」欄と「社説」欄を取り上げて、それぞれの欄の記事傾向をみてる。

聖書日課と聖書研究欄

発行年月日	巻	号	タイトル	著者
1904 (明治37) 年5月10日	1	1	明治三十七年五月分	エフ・エム・フィウジル註解
1904 (明治37) 年5月10日	1	1	OUR BIBLE READINGS. May 1904	F.M.Fugill
1904 (明治37) 年6月1日	1	2	明治37年6月分	エム・エー・ホイットマン註
1904 (明治37) 年7月1日	1	3	明治37年7月分	エフ・ダブルユー・ローランズ
1904 (明治37) 年7月1日	1	3	明治37年8月分	三谷たみ子註
1904 (明治37) 年7月1日	1	3	VACATION THOUGHTS	
1904 (明治37) 年7月1日	1	3	THE SUMMER CONFERENCES OF THE AMERICAN COMMITTEE	C.V.Hibbard
1904 (明治37) 年7月1日	1	3	STRENGTH AND BEAUTY	T.E. HAND
1904 (明治37) 年7月1日	1	3	OUR BIBLE READINGS. July 1904	F.W. ROWLANDS
1904 (明治37) 年7月1日	1	3	August, 1904	Tami Mitani
1904 (明治37) 年9月1日	1	4	明治37年9月分	エー・シー・ボザンケット註
1904 (明治37) 年11月1日	1	6	明治37年11月	スザン・エイ・サール注解
1904 (明治37) 年12月1日	1	7	明治37年12月	ケント注釈
1905 (明治38) 年1月1日	1	8	第一週第二日『先駆者』	ハワード・エー・デヨンストン
1905 (明治38) 年1月1日	1	8	第二週第七日『早天にイエス祈り給へり』	主の賤婢
1905 (明治38) 年1月1日	1	8	第三週七日『病あるものは医者を需む婢む』	ピンフォード
1905 (明治38) 年1月1日	1	8	第四週第三日『安息日』	ジョージアヌ・ボーカス
1905 (明治38) 年2月1日	1	9	第七週第七日馬可伝5章1, 2	エッチ・ケー・ストレーン
1905 (明治38) 年3月1日	1	10	第九週第二日耶蘇弟子等ヲ遣わす	エル・エム・パウエル
1905 (明治38) 年3月1日	1	10	第十一週第五日 イエス隠ることを得ず	イー・デー・パターソン
1905 (明治38) 年4月1日	1	11	第一七週第四日 富貴	エー・オルトマン
1905 (明治38) 年5月1日	2	1	馬可伝	山鹿旗之助
1905 (明治38) 年6月1日	2	2	第二十二週第一日二種の愛/第二十五週第三日裂けたる幔/第二十六週第一日魅りの勝利	笹尾鉄三郎
1905 (明治38) 年7月1日	2	3	馬可伝研究復習	マクドナルド
1905 (明治38) 年8月1日	2	4	アブラハム	シー・エー・コンヴァース
1905 (明治38) 年8月1日	2	4	海のかなた 米国に於ける夏期会合	エッチ・エム
1905 (明治38) 年9月1日	2	5	モーセ	ハンド
1905 (明治38) 年9月1日	2	5	月ぐさ	しづのや
1905 (明治38) 年10月1日	2	6	使徒行伝	エー・シー・マクドナルド
1905 (明治38) 年11月1日	2	7	使徒行伝	マクドナルド

1905 (明治38) 年12月1日	2	8	使徒行伝 (二)	エー・シー・マクドナルド
1906 (明治39) 年1月1日	2	9	使徒行伝 (三)	エー・シー・マクドナルド
1906 (明治39) 年2月15日	2	10	使徒行伝 (四)	エー・シー・マクドナルド
1906 (明治39) 年3月15日	2	11	使徒行伝 (五)	マクドナルド
1906 (明治39) 年4月15日	2	12	使徒行伝 (七)	マクドナルド
1906 (明治39) 年11月15日	3	7	神国建設に関する研究	イー・エム・ボイド
1907 (明治40) 年5月15日	4	5	神の国 (二)	柏井 園
1908 (明治41) 年2月15日	5	2	イエスの祈禱 (下)	柏井園
1908 (明治41) 年2月15日	5	2	小児を見ての祈り	梁川
1908 (明治41) 年8月15日	5	7	基督教の生活	柏井園
1909 (明治42) 年5月15日	6	5	ピリピ書解釈 (一)	柏井園
1909 (明治42) 年6月15日	6	6	ピリピ書研究 (二)	柏井 園
1909 (明治42) 年6月15日	6	6	聖書研究のしをり	マクドナルド
1909 (明治42) 年8月15日	6	7	人間に関する聖書の教理	平岩愼保
1909 (明治42) 年9月15日	6	8	聖書研究の必要	
1909 (明治42) 年9月15日	6	8	耶蘇の教へし正義 (上)	柏井 園
1909 (明治42) 年9月15日	6	8	ヘレン・グウルド女史の聖句暗誦 句略同盟	
1909 (明治42) 年10月15日	6	9	ピリピ書解釈 (三)	柏井 園
1909 (明治42) 年10月15日	6	9	聖書の日課 (続き)	
1909 (明治42) 年11月15日	6	10	ピリピ書解釈 (四)	柏井 園
1909 (明治42) 年12月15日	6	11	ピリピ書解釈 (五)	柏井 園
1910 (明治43) 年12月15日	7	12	基督教の弟子道 (中)	チアーロット・アダムス
1911 (明治44) 年6月1日	8	6	基督教生活の情調	柏井 生
1912 (明治45) 年2月1日	9	2	耶蘇の説きし救 (一)	柏井 園
1912 (明治45) 年3月1日	9	3	耶蘇の説きし救 (二)	柏井 園
1912 (明治45) 年4月1日	9	4	耶蘇の説きし救 (三)	柏井 園
1912 (明治45) 年6月1日	9	6	耶蘇の苦喪	柏井園
1912 (明治45) 年7月1日	9	7	耶蘇の説きし救 (四)	柏井園

論説欄

発行年月日	巻	号	タイトル	著者
1905 (明治38) 年5月1日	2	1	十字架のキリスト	今井寿道
1905 (明治38) 年5月1日	2	1	感化力	イリアム・オクスレーン
1905 (明治38) 年6月1日	2	2	東京青年のはなし	植村正久
1905 (明治38) 年7月1日	2	3	女子の性質と基督教	本田増次郎
1905 (明治38) 年7月1日	2	3	進撃的基督教	山室軍平
1905 (明治38) 年10月1日	2	6	氣質上の罪	しづのや
1905 (明治38) 年12月1日	2	8	吾党の女子教育	山月子
1906 (明治39) 年2月15日	2	10	女子青年会事業の範囲	平岩愼保
1906 (明治39) 年2月15日	2	10	基督教青年会に対する同情の理由	塚本

1907(明治40)年9月15日	4	8	基督教的生命	植村 正久
1907(明治40)年9月15日	4	8	勇猛犠牲の精神	ミエルウッド・エディ
1907(明治40)年9月15日	4	8	御断り	仮記者
1908(明治41)年1月15日	5	1	迎春の辞	一記者
1908(明治41)年1月15日	5	1	新春の福音	エー・シー・マクドナルド
1908(明治41)年1月15日	5	1	婦人化粧の美と信仰の美	川副桜喬
1908(明治41)年2月15日	5	2	事業と力	エー・シー・マクドナルド
1908(明治41)年2月15日	5	2	人品と宗教	野村佐一郎
1908(明治41)年2月15日	5	2	苦の思い出と楽の思い出/誠の力	川副桜喬
1908(明治41)年3月15日	5	3	矯花録	川副桜喬
1908(明治41)年4月15日	5	4	春の祈禱	一記者
1908(明治41)年4月15日	5	4	宗教と生死の観念	桜喬生
1908(明治41)年5月15日	5	5	『基督教を憶え』	エー・シー・マクドナルド
1908(明治41)年5月15日	5	5	落日夕日の美と人生の終焉／ホール博士懷ふ ／噫/明治靈界の偉人津田仙翁逝く	川副桜喬
1908(明治41)年6月15日	5	6	花の黙示	桜喬生
1908(明治41)年6月15日	5	6	永生	伊藤民衛
1908(明治41)年10月15日	5	9	汝等の笑を哀哭に易へよ	一記者
1908(明治41)年10月15日	5	9	至醇の愛	桜喬生
1908(明治41)年10月15日	5	9	恐怖の実験	大坪秋人
1908(明治41)年10月15日	5	9	ブラウニングの「サウロ」を読む	河井道子
1908(明治41)年10月15日	5	9	憐れなる母子	川副生
1908(明治41)年10月15日	5	9	前号所載植村先生の「宗教の選択」 を讀みて	木山一夢
1908(明治41)年10月15日	5	9	水の精(第六回)	辻村靖子
1908(明治41)年10月15日	5	9	ラオダミア夢物語	桜喬生
1908(明治41)年12月15日	5	10	メレーライオンの教育主義	羽丹清次郎
1908(明治41)年12月15日	5	10	体育と社会的遺伝	大森兵蔵
1908(明治41)年12月15日	5	10	マセウ・ア、ノルドの詩	秋田雨雀
1908(明治41)年12月15日	5	10	納戸町女子青年会宿舍落成式概況	一記者
1908(明治41)年12月15日	5	10	時代思想と青年子女の覚悟	大隈
1908(明治41)年12月15日	5	10	水の精(承前完結)	辻村靖子
1908(明治41)年12月15日	5	10	小塔	坪田 城山
1908(明治41)年12月15日	5	10	爾の信仰爾を癒せり	桜喬生
1908(明治41)年12月15日	5	10	荒野に於けるキリストの誘惑	桜喬生
1908(明治41)年12月15日	5	10	めざまし日記の一節	桜喬生
1908(明治41)年12月15日	5	11	保羅の宗教的生活	柏井園
1909(明治42)年5月15日	6	5	ミルトンの貞操観	小松武治
1909(明治42)年5月15日	6	5	努力と信仰	久連松弘

社説欄

発行年月日	巻	号	タイトル
1905 (明治38) 年2月1日	1	9	
1905 (明治38) 年4月1日	1	11	現今の女学生－教徒の天職
1905 (明治38) 年5月1日	2	1	一周年に際して所懐を述ぶ
1905 (明治38) 年6月1日	2	2	家庭伝道
			基督教女子青年会とは何ぞや
1905 (明治38) 年8月1日	2	4	基督教女子青年会とは何やぞ (二)
1905 (明治38) 年9月1日	2	5	基督教女子青年会とは何やぞ (三)
1905 (明治38) 年10月1日	2	6	女子基督教青年会とは何やぞ (四)
1905 (明治38) 年11月1日	2	7	万国女子基督教青年会祈禱週日
1906 (明治39) 年1月1日	2	9	『万事新也』
1906 (明治39) 年2月15日	2	10	衷心の真実
1906 (明治39) 年3月15日	2	11	誘惑論
1906 (明治39) 年4月15日	2	12	交友の情
1909 (明治42) 年9月15日	6	8	人格的感化の秘密－アリス・フレイマン・パアマアの伝を読む
1909 (明治42) 年10月15日	6	9	秋の啓示/神の生命の遠近/宣教開始五十年祝会/丹羽清次郎氏を迎ふ
1909 (明治42) 年11月15日	6	10	健かなれ、潔かれ
1909 (明治42) 年12月15日	6	11	基督降誕の新しき意識

5、執筆陣の傾向

どのような人々が本誌に寄稿していたのであろうか。掲載の署名記事を整理してみると、以下のような結果が得られた。

- ① 柏井園、柏井生 24回
- ② マクドナルド 22回
- ③ 川副桜喬、桜喬生、川副生 20回
- ④ 辻村靖子 15回
- ⑤ いづのや、しづ 14回
- ⑦ 河井道子 14回 (談話含)
- ⑧ 白井胤祿 12回
- ⑨ 小此木松子、小此木、小此木松子訳 8回
- ⑩ 小橋三四子、三四子 8回
- ⑪ 井深花子 6回
- ⑫ 植村正久 6回
- ⑬ 山室軍平 5回

最も多く寄稿しているのは、柏井園 (1870.7.22-1920.6.25) である。柏井園は高知中学校を中退し、片岡健吉ら設立の高知共立学校を経て、1891年京都同志社普通学部を卒業し

ている。在学中にグリナン,R.B.) から受洗。日本基督教会高知教会に属し、高知英和女学校教員となったが、植村正久に認められて1893年明治学院講師(のち教授)となった。植村主筆の『福音新報』の編集を手伝った。1903年ユニオン神学校に留学、05年帰国し植村の創設した東京神学社に転じた。一時日本基督教青年会同盟幹事となり、『開拓者』の発刊(06)、編集に当り、万国学生基督教青年会大会の開催(07)に活躍した。

マクドナルド(1874.10.15-1931.7.18)はすでに述べたように、1904年日本にYWCAを創立するために国際幹事として来日、05年日本YWCAおよび東京YWCAを創立し初代幹事に就任している。当時のYWCAの活動の中心であった。ちなみに、マクドナルドはYWCAの活動の他、津田英学塾で教鞭をとり、また各種の社会福祉事業にも尽力した。

後に、恵泉女学園の創立者河井道は、1887年に長老派の米人宣教師スミス,S.C.が札幌に開設した全寮制のスミス女学校(北星学園)の最初の7名の生徒の一人。同校で新渡戸稲造に出会い、伴われて米国留学し、1904年プリンマー女子大学を卒業。津田梅子の女子英学塾(津田塾大学)で教えていたが、日本のYWCA組織化に津田とともに参加し、12年最初の日本人総幹事となった人物である。

白井胤録(1873.7.8-1916)は、1895明治学院神学部を卒業し、名古屋において南長老教会ミッションの下で伝道。1902年4月7日按手礼を受けて生教師となり、東京神学社の創設に当って植村正久を助け、04年開校とともに講義も担当した。その後『福音新報』の主筆となった。

井深花子(1865.2.4-1945.9.13)は、1899年神戸英和女学校卒業後、米国マウントホリヨーク大学に遊学。同28年卒業、帰国。1900年4月井深梶之助と結婚。米国から帰国後、1931年まで神戸女学院、東洋英和女学校で教鞭をとり、YWCA同盟委員長の他、日本基督教婦人矯風会監事、東京女子大学理事、などを歴任した。

植村正久(1858.1.15-1925.1.8)は、横浜にて修文館、バラ,J.H.の私塾などに学ぶうちキリスト教に触れ、1873年5月横浜公会でバラから受洗。まもなく伝道を決意し、ブラウン塾、東京一致神学校に学び、80年按手礼を受けて、下谷一致(豊島岡)教会の牧師に就任。87年番町一致(のちの一番町、富士見町)教会を設立、生涯その牧師を努めた。

山村軍平(1872.9.22-1940.3.13)は、救世軍日本司令官として知られた人物である。95年12月入軍。翌年1月、日本人初の士官となる。1900年娼妓自由廃業運動を開始、遊廓に進撃して暴徒の襲撃により負傷し、同情が急速に救世軍に集まった。06年日露戦争後の不況対策として労働紹介所を設置、07年救世軍万国司令官ブース,W.大将来日に際しては通訳を務め、ブース離日に際し日本救世軍書記長官に任じられ、日本司令となった。

中心的な執筆陣は、YWCAの指導者と当時のキリスト教の指導的な立場にあった人々であったことがわかる。しかも、植村正久及び植村と近い柏井や白井といった人たちが誌面を飾っていた。

それぞれがどのような記事を寄稿していたかを一覧化してみる。

柏井園

発行年月日	巻	号	欄	タイトル
1907 (明治40) 年5月15日	4	5	聖書研究	神の国 (二)
1907 (明治40) 年9月15日	4	8	講習会講演	眺立比書
1907 (明治40) 年9月15日	4	8	雑纂	サマリヤの女
1908 (明治41) 年2月15日	5	2	聖書研究	イエスの祈禱 (下)
1908 (明治41) 年5月15日	5	5	静思	宗教と衣服
1908 (明治41) 年8月15日	5	7	聖書研究	基督教の生活
1908 (明治41) 年12月15日	5	11	論説	保羅の宗教的生活
1909 (明治42) 年2月28日	6	2	特別寄書	愛と国民性
1909 (明治42) 年3月15日	6	3	説苑	祝福と活動
1909 (明治42) 年5月15日	6	5	聖書の研究	ピリピ書解釈 (一)
1909 (明治42) 年6月15日	6	6	聖書の研究	ピリピ書研究 (二)
1909 (明治42) 年8月15日	6	7	(*前文)	約翰伝の教訓一班
1909 (明治42) 年9月15日	6	8	聖書の研究	耶蘇の教へし正義 (上)
1909 (明治42) 年10月15日	6	9	聖書の研究	ピリピ書解釈 (三)
1909 (明治42) 年11月15日	6	10	聖書の研究	ピリピ書解釈 (四)
1909 (明治42) 年12月15日	6	11	聖書の研究	ピリピ書解釈 (五)
1910 (明治43) 年12月15日	7	12	(*画)	コレレジョの聖き夜
1912 (明治45) 年1月1日	9	1	談叢	聖書研究に関する注意
1912 (明治45) 年2月1日	9	2	聖書研究	耶蘇の説きし救 (一)
1912 (明治45) 年3月1日	9	3	聖書研究	耶蘇の説きし救 (二)
1912 (明治45) 年4月1日	9	4	聖書研究	耶蘇の説きし救 (三)
1912 (明治45) 年5月1日	9	5		黙示録の基督
1912 (明治45) 年6月1日	9	6	聖書研究	耶蘇の苦喪
1912 (明治45) 年7月1日	9	7	聖書研究	耶蘇の説きし救 (四)

マクドナルド

発行年月日	巻	号	欄	タイトル
1905 (明治38) 年7月1日	2	3	聖書研究	馬可伝研究復習
1905 (明治38) 年10月1日	2	6	聖書研究	使徒行伝
1905 (明治38) 年11月1日	2	7	聖書研究	使徒行伝
1905 (明治38) 年12月1日	2	8	聖書研究	使徒行伝 (二)
1906 (明治39) 年1月1日	2	9	聖書研究	使徒行伝 (三)
1906 (明治39) 年2月15日	2	10	聖書研究	使徒行伝 (四)
1906 (明治39) 年3月15日	2	11	聖書研究	使徒行伝 (五)
1906 (明治39) 年4月15日	2	12	聖書研究	使徒行伝 (七)
1908 (明治41) 年4月15日	5	4	付録	卒業生諸姉を餞す
1908 (明治41) 年5月15日	5	5	論説	『基督教を憶え』
1908 (明治41) 年9月15日	5	8	本欄	信者たる道

1909(明治42)年6月15日	6	6	聖書の研究	聖書研究のしをり
1909(明治42)年9月15日	6	8	説苑	ブラウニングの詩『アンドレア・デル・サルトオ』につきて
1911(明治44)年10月1日	8	9		帰国の御挨拶
1912(明治45)年1月1日	9	1	講話	新らしき生命
1912(明治45)年2月1日	9	2	講話	神を見得る人
1912(明治45)年3月1日	9	3	談叢	現今の日本婦人
1912(明治45)年6月1日	9	6		わが目に映ずる日本の婦人界

河井道

発行年月日	巻	号	欄	タイトル
1905(明治38)年11月1日	2	7	藻塩草	米国女子学生生活
1905(明治38)年12月1日	2	8	藻塩草	米国女学生生活(二)
1906(明治39)年1月1日	2	9	藻塩草	米国女学生生活(三)
1906(明治39)年2月15日	2	10	藻塩草	米国女子生活(四)
1906(明治39)年11月15日	3	7	雑纂	米国女学生生活(八)
1908(明治41)年8月15日	5	7	講演集	開会の辞
1908(明治41)年10月15日	5	9	論説	ブラウニングの「サウロ」を読む
1909(明治42)年6月15日	6	6	訪問	河井道子女史の談話
1911(明治44)年6月1日	8	6		欧米女学生の美風 其の一
1912(明治45)年1月1日	9	1	談叢	汝の若き日に於いて救主を知れ

白井胤禄

発行年月日	巻	号	欄	タイトル
1909(明治42)年4月15日	6	4	史伝	賢母モニカ(上)
1909(明治42)年5月15日	6	5	史伝	賢母モニカ(下)
1909(明治42)年10月15日	6	9	史伝	望なき人の友メリイ・リイド(上)
1909(明治42)年11月15日	6	10	史伝	望なき人の友メリイ・リイド(下)
1909(明治42)年12月15日	6	11	史伝	慈善家エリザベス・フライ
1910(明治43)年12月15日	7	12	道の栞	神の摂理について
1911(明治44)年6月1日	8	6		信仰雑話
1911(明治44)年10月1日	8	9	伝記	西班牙の聖女テレサ(下)
1912(明治45)年3月1日	9	3	文苑	聖盃
1912(明治45)年5月1日	9	5		思ひ出
1912(明治45)年6月1日	9	6		反撥力
1912(明治45)年7月1日	9	7	談叢	所謂新しき女

井深花子

発行年月日	巻	号	欄	タイトル
1907(明治40)年6月15日	4	6	雑纂	女子基督教青年会が国家に貢献すべきことども
1908(明治41)年8月15日	5	7	講演集	基督教家庭
1909(明治42)年3月15日	6	3	説苑	女子脩養の方法

1909 (明治42) 年12月15日	6	11	説苑	明治の女子の心得
1911 (明治44) 年6月1日	8	6	印度見聞記	斯うしてしておけばよかったと思ふこと
1911 (明治44) 年6月1日	8	6	印度見聞記	十人の孤児と共に起居する若き主婦の朝務め

植村正久

発行年月日	巻	号	欄	タイトル
1905 (明治38) 年6月1日	2	2	論説	東京青年のはなし
1906 (明治39) 年1月1日	2	9	講談	凱歌
1907 (明治40) 年9月15日	4	8	論説	基督教的生命
1908 (明治41) 年9月15日	5	8	(*前文)	宗教の選択
1909 (明治42) 年3月15日	6	3	講壇	耶蘇に事へたる主婦
1912 (明治45) 年5月1日	9	5		世界一周の感

山室軍平

発行年月日	巻	号	欄	タイトル
1905 (明治38) 年5月1日	2	1	講演	伝道
1905 (明治38) 年6月1日	2	2	講演	靈魂上の病人
1905 (明治38) 年7月1日	2	3	論説	進撃の基督教
1907 (明治40) 年4月15日	4	4	評論	弱者の友イエス
1908 (明治41) 年8月15日	5	7	講演集	素人伝道論

むすび

これまで概観してきた同誌の誌面に現れた書誌的な変化・特色を整理し列挙する。

- 1、和文・英文が対になった編集が1巻7号まで続いている。1巻5号は英文のみである。
- 2、1巻7号までは英文の聖書研究の翻訳を掲載したが、聖書研究の掲載方法が1巻8号より変化している。
- 3、聖書研究の註訳者として、日本人で最初に登場するのは三谷たみ子 (1-3) である。
- 4、1巻8号より、英文記事は詩などの文学作品がやや多くみられる。
- 5、英文は2巻12号の Association Notes の記事をもって終了、以後英文記事は見当たらない。
- 6、発刊当時は、女子青年会の準備委員会が刊行、設立後は同会が発行母体となっている。
- 7、誌面変化は1巻8号より見られる。日本人で最初の署名の論考を寄稿しているのは真堂学人であった (「新進の生命」1巻8号)。1巻8号より、欄構成が見られる。同号に掲載された「家庭」欄の最初の啓蒙的な論稿は「家庭の建設」である。
- 8、1巻9号の欄構成は社説、聖書研究、家政。1巻10号には「講演」加わる。2巻1号には「論説」、2巻2号では「雑録」が登場するなど、誌面は変化している。
- 9、2巻3号より2巻6号に、「基督教女子青年会とは何ぞや」の記事が登場している。2巻8号には「吾党の女子教育」山月子の記事が掲載されている。2巻10号「女子青年

会事業の範囲」(平岩愼保)、「基督教女子青年会に対する同情の理由」(塚本)の記事を発信している。

- 10、最初にYWCAを組織した学校は小石川女子伝道学校であるが(1-8)、2巻4号より、雑録に「横浜通信」関根他(2巻4号)、「徳島女子基督教青年会」(2巻5号)などの支部、学校からの通信記事が掲載されるようになり、機関誌としての機能をより果たしている誌面へと変化している。
- 11、2巻7号より、後の指導者となる河井道が登場している。('米国女学生生活'2巻7号より連載)
- 12、2巻9号に東京基督教女子青年会(津田梅子会長)結成記事が掲載される。
津田との関係で、当時のYWCAには女子英学塾の関係者がかなり参加していた。
- 13、2巻10号あたりから日本人の執筆者が誌面の大半を占めるようになる。同時に啓蒙的な記事が多くなり、聖書研究が縮小される傾向が見られる。
- 14、2巻12号に基督教女子青年会第一寄宿舎の記事、4巻4号に夏期学校の記事、4巻6号に総会記事が掲載されるなど、YWCAの活動の拡大が記事に反映されている。
- 15、4巻以降、各学校の基督教女子青年会の記事多数掲載。4巻5号あたりから各地の基督教女子青年会の記事が多くなる。「各地女子基督教青年会情况」(4-5)、「通信記事」(4-12)、「女子青年会記事」(5-1以降)など。
- 16、執筆者の中心はYWCAの指導的立場の人と当時のキリスト教界のリーダーであった山村軍平、植村正久、井深梶之助、留岡幸助、井深花子、新渡戸稲造、元田作之新、本田貞子などであった。加えて、女子英学塾関係の津田梅子、河井道子、小此木松子、辻村靖子が執筆陣の一翼を担っていた。特に、小此木と辻村は翻訳記事を担当していたと想像される。
- 17、号を重ねるごとに、次第に海外の女子教育に関する情報、海外との関わり、キリスト教家庭のあり方、キリスト教的女性観(「婦人化粧の美と信仰の美」)など、新しい日本女性としての生き方を発信している。

以上の特色を持つ同誌の雑誌としての特徴を集約すると、第1に、聖書中心(宗教的)、第2に、キリスト教関係の論説、文芸などの記事(啓蒙的)、第3に、会の活動、会員動向、組織に関する情報誌(機関誌的)ということになる。すなわち、同誌は機関誌ではあるが、啓蒙雑誌としての色彩が強い雑誌といえるであろう。

附記：本稿は以下の科研費による研究成果の1部である。

「近代日本と女性キリスト者の知的形成・文化貢献」(基盤C、20-23年、研究代表樽松かほる)

「近代日本人のキャリアデザイン形成と教育雑誌」(基盤B、18-21年、研究代表菅原亮芳)

参考文献：

日本YWCA80年史編集委員会編『水を風を光を 日本YWCA80年』日本キリスト教女子青年会、1987年5月

日本YWCA100年史編集委員会編『日本YWCA100年史 女性の自立をもとめて 1905-2005』日本キリスト教女子青年会、2005年5月

日本YWCA100年史編集委員会編『日本YWCA100年史 年表1905-2005』日本キリスト教女子青年会、2005年11月

復刻『女子青年界』不二出版、1994年1月

NCC教育部歴史編纂委員会編『教会教育の歩み 日曜学校から始まるキリスト教教育』教文館、2007年5月

基督教学校教育同盟編『日本におけるキリスト教学校教育の現状』基督教学校教育同盟、1961年10月

久山康編『近代日本とキリスト教』基督教学徒兄弟団、1962年5月

日本キリスト教歴史大事典編集委員会編『日本キリスト教歴史大事典』教文館、1988年2月